

友のために命をかける

園長 児嶋 草次郎

友愛園を卒園し多くの人たちに支えられ大学進学し、みごと教育採用試験を突破し、小学校の先生として働いていたK男が、1月8日に亡くなりました。

卒園生を亡くしたのは初めてではないし、20代の次男も亡くした経験を持っているし、連絡を受けた時は、できるだけ冷静に振るまおうと思いました。3日ほど前に彼とは電話で話したばかりでした。

しかし、通夜に出席し、立ち並ぶ遺族たちの姿を見た瞬間、何かは私の心の中で爆発しました。得体の知れないエネルギーが腹の底から湧き上がり、体中に力がみなぎり、「バカヤロー！」と叫びたい気持ちを、手を何度も握りしめながら必死で我慢しました。帰りの車で、一人、何度も嗚咽（おえつ）が漏れ出てくることに身をまかせました。

神はなぜ彼の命を奪わねばならなかったのか。2歳で友愛園に入所し、小学校、中学校、高校とずっと園から通い、そして、県外の大学で小学校の先生になるための勉強を積み、その志も実現し、人気の先生になった。色んな人たちの支えはあったとしても、彼自身の涙ぐましい努力で自分の夢を実現し、世のため人のために貢献し始めていたのに、なぜ彼をこの世から奪わねばならないのでしょうか。そんな悔しさが次々と湧き出して来ます。

次の日の葬式では、遺族の許可を得て、その悔しさを、最後の別れの時、もう冷たくなっている彼の遺体に花を添えながら、ぶつけさせてもらいました。

「バカヤロー、お前は、命の大切さを分かっていたのだから！」

通夜、葬式には、彼と同世代の多くの卒園生たち（『友愛バンド』）が出席してくれました。それから少し時がたち、心の中も静かに波を打つようになり、次男やはるなさんの死の時と同じような思いが浮んで来ています。

『もしかしたら、だれかの身代わりになってくれたのかもしれない。』

私はもう50年以上この仕事をさせていただいていますが、在園している子供が病気とか交通事故とかで死亡するという体験をしたことがないのです。50名弱の子供たちが、24時間365日ここで生活しますので、普通の家庭より何倍もそのリスクは高いのです。もし園内で子供が亡くなれば、世間からは、厳しくその管理責任を問われることとなります。

石井記念友愛園の友愛は、聖書の言葉から来ています。「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。」（ヨハネによる福音書、15・13）という言葉です。私はその言葉を勝手に解釈しているのです。次男の時もはるなさんの時も。そして今回も、そう解釈したいと思うようになっています。そうすれば、その死に意味があると思えるような気分になり、恨み・つらみから解放されるようになります。もしかしたら、彼の教え子のだれかだったのかもしれない。

命というものは枝先にくっついていて木の葉のように儚いものだとつくづく感じます。私も、この人生において残された時間は少なくなってきましたが、まだまだ果たすべき使命が残っていますので、体を大事にしながらも老骨にムチ打ちながら、前進していきたいと思っています。きっと天国の彼らが支え

てくれるでしょう。

以下、石井十次記念式（1月30日）での挨拶です。

第110回石井十次記念式に御出席くださいまして、ありがとうございます。主催者として、一言御挨拶申し上げます。

ただ今第110回と申し上げましたが、没後110年という節目の年です。と言うことは、戦後石井記念友愛社の開設時の責任者であり、初代理事長である児嶋虬一郎生誕110年ということでもあります。昭和20年に児童救済事業を再開していますので、来年は、石井記念友愛社にとっても創立80周年ということにもなります。

石井記念友愛社は、今年から来年にかけてこの大きな節目に立たされるということになります。

ロシア・ウクライナ戦争は終わるどころかますます深みにはまっていき、その飛び火がイスラエルにもとんで、中東に広がる可能性も出て来ています。我が国においては、正月元旦から能登で大地震が発生し、多くの方が命を家を失うことになっています。政治家たちは金を集めることに汲々とし、我が足元を見ずグローバリズムの流れに身をまかせ、地域や福祉現場と政策との間にすき間風が吹くようになって来ています。

地域格差はますます進行し、落ちこぼれていく人々もますます生み出すような社会状況になって来ています。特にアメリカの価値観を善とするグローバリズムは、世界各地で行き詰まって来ているのに、わが国は盲信して追随しているようにも見えます。日本にはすばらしい歴史があり、生活文化があり、先人たちが築きあげた知恵があります。このことを大都会の政治家や学者たちは忘れてしまっているのではないか。

そういう社会状況の中で社会福祉法人石井記念友愛社は、どうあらねばならないのか。私たちは、石井十次没後110年、児嶋虬一郎生誕110年記念事業として、主に、都城市と高鍋町と木城町において、三つの事業を行って来ます。

まず都城市内の小規模児童養護施設「よしこの家」に隣接して、母子生活支援施設「みどりホーム」を建設中です。今まで何度も「友愛通信」等でお知らせして来ましたが、改めて、その目的についてここで再確認させていただきます。

私は最近、子供の貧困は、その母親が妊娠した時から始まると認識しております。本来、女性が妊娠し子供を出産するという一連の営みは、神聖でその家族にとっても親族にとっても、また地域にとっても国家にとっても、ありがたく感謝され喜ばれるべき大事業であります。

動物は、次世代を作って初めて時を越えて存続していける生物であります。人類は何よりもまず、その営みを大事に守り支えて来ました。少子高齢化、人口減のこの日本社会において、児童福祉の根幹はまずその母子支援に置かれるべきですが、どういうわけか多くは、妊娠したその女性自身の責任として片付けられて来ました。その結果、“望まれない妊娠”という闇の世界に追い込まれ出産して路頭に迷う女性も現実に多くいます。不幸なことに、子殺し、捨て子と言うような事件も起きています。

母子生活支援施設は、まず、そのような世の中の感謝とは遠い所で妊娠してしまった母子のための施設であらねばならないと思います。生んだ母親も生れ落ちる子供も、プラス思考で生きて行けるような価値観に運命を転換できるように支援していかねばなりません。国も行政も、今社会的養護児童の里親委託率を上げることばかりを考えていますが、私にはグローバリズムに洗脳され優先順位が考えられなくなっているようにしか見えません。宮崎県には、この母子生活支援施設が現在存在せず、何としてでも設置しなければなりません。今年の4月スタートの予定でしたが、ウクライナの戦争やコロナ

禍の中で物流が停滞したり、価格が高騰したりして、1か月ほど完成が遅れそうです。

次に高鍋の事業です。町立保育園を御縁があって民間移譲していただき、「石井記念明倫保育園」と名称を変え、この度老朽化により全面改築をすることになりました。現在建設は進行中です。これも何度も「友愛通信」で書いております。

高鍋町が「歴史と文教の町」というキャッチコピーを掲げておりますが、その文化が醸成された地域の中央部分に位置するのが、現在の保育園のあるあたりです。構造物を建てようとする時、その土地がどのような歴史の舞台となって来たのかを想像するのは、事業者の努めでしょう。そしてもしその地に不幸な歴史が刻まれているのであれば、キチンと弔わなければなりません。現在目に見えないからと言って過去を無きものにしてはなりません。人間は歴史から学び未来を作っていく生物であるからです。

しかし、明治時代以前、高鍋を300年近く統括して来た秋月氏時代、家老屋敷通りと上級商店街にはさまれたこの空間は、空白地帯になっていたようなのです。それ以前この土地で何かがあったのかもしれない。

それ以前、高鍋がまだ財部（たからべ）と言われていた時代、高鍋を支配していた一族は、土持氏でした。もともとは大分宇佐八幡宮の神職をしていたと言われていました。荘園等を守るために宮崎日向に入り、延岡を中心に活動していたようです。紫式部が活躍していた平安時代です。

県内広く豪族として支配するようになり、財部土持氏としてそのグループから独立するのは1223年頃から1457年までです。

そして、西都都於郡（とのこおり）の伊東氏に滅ぼされてしまいました。秋月氏が福岡朝倉の方から移封（いほう）されて来たのは1587年の頃です。秋月家が高鍋を支配したのは280年間ですが、財部土持氏は230年間ほど高鍋を治めています。資料はほとんど残っていないようですが、高鍋の町の基盤をつくったのは、土持氏ではないかと最近思い始めています。その資料がほとんどないということは、土持氏から伊東氏に支配者が変わる時に、この地で徹底的な破戒と抹殺がおこなわれたのかもしれない。

話をもとにもどします。私はこの地は、石井十次を生んだ明倫文化発祥の地だと位置づけており、単なる保育園の改築にとどめるのではなく、その明倫文化を再生させ、町の活性化の核になるような複合・共生施設にしたいと考えました。全体の名称を「友愛の森」とし、保育園の建物には小規模児童養護施設を入れることにしました。

普通の保育園は、夕方子供たちが各家庭に帰ったら、職員も引きあげ、夜は真っ暗です。母子家庭が多くなり、DVや虐待などを生み出すような非常に家庭力のもろい世帯も多くなって来ています。それであるのに保育園は全くと言ってよいほど進化していないのです。縦割り行政の弊害でしょう。

そこに小規模児童養護施設を入れこむと、24時間、365日機能するようになります。さらに4階部分には、ビジネスホテルのような多目的室を3室設けます。先ほどのDV等の時の駆け込み寺として、あるいは災害時の避難施設として活用できます。

さらに隣接する明治期の古い建物を改修して、障がい者の働く場として整備します。この古い建物の改修費については、寄付を募集していますので、皆様御協力をよろしくお願い致します。クラウドファンディングもやりますので、友愛社のことを知らない知人友人にも情報を広めていただけるとありがたいです。

今年、および来年度は、石井記念友愛社の存在意義が問われる年になると思います。石井記念友愛社としましては創立戦後80年にむけて、小さくとも石井記念友愛社資料室みたいなものを作りたいと考えています。戦後の歴史を振りかえり、その理念と文化を再確認し、未来へ向けての足掛りとしなければ

なりません。静養館西側の倉庫を改修する予定です。戦後の石井記念友愛社の歴史を象徴するような資料や写真をお持ちの方は、御提供いただければありがたいです。

厳しい社会状況の中ではありますが、石井記念友愛社は、石井十次の理念と福祉文化を根拠として、だれ一人とり残さない共生の地域社会つくりのため、命をかけて一步一步前進していくことを、石井十次の墓前においてお誓いし、御挨拶と致します。本日は、ありがとうございました。